

白蓮社図の歴史

道 津 綾 乃

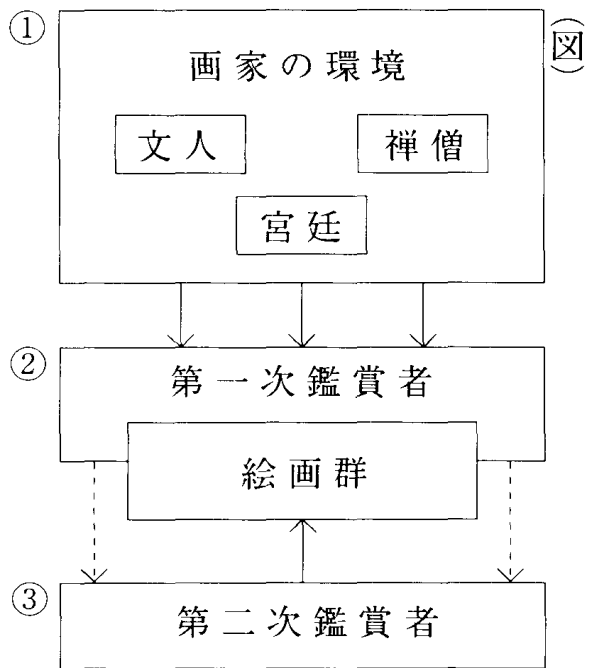
一、本稿の目的

筆者は本稿を、宋代絵画を社会史・文化史的な視点から把握するための第一歩として位置づけている。

従来より、宋代は「中国絵画の栄光の時代といわれている」^①。前時代に、仕女・聖賢・僧侶・道士などを描くことで盛んになった人物画が、歴史故事や社会生活、文化活動の様子を題材にすることでさらに発達し、山水画・花鳥画の進展、商品価値を付された作品の出現、漢民族以外の諸民族の作品の量産^②など、話題に事欠かないことから出た言葉であろう。この絵画史の視点が画家に置かれていることは、小川裕充氏の「画家と同時代、あるいは前時代の人物が、肖像画などの対象として洋の東西を問わず絵画化されるのは、自然なことであるとしても、画家の時代までに成立していたある説話が、無条件に絵になることはない。また、画家と同時代の

風俗も、同様に、何らかの契機がなければ絵画化されることはない^③。」という指摘を待つまでもない。こうした考え方は、現存作品の様式的特徴から、画家の師弟関係や画風の継承・影響を検討する様式史の見地から重要であろう。しかし、絵画を社会現象・文化遺品として捉えるとき、この考え方を転用することはできない。なぜならば、絵画作品は鑑賞されることによって、何百年という歴史が、画家の意思とは無関係に、刻まれてゆくからである。

筆者は、さきの視点による宋代絵画の歴史を作業仮定の段階ながら、次に示す図のように考えている。これは、宋代絵画史に三段階あることを示している。まず、絵画作品成立の地盤となる画家と彼らの生活環境を、第一段階として捉えなければならぬ。次に、彼らによって描かれた作品は、直接第三者（友人・親族であったり商人であったりする）の手に渡っているはずである。絵画作品が世の中へ出るために必要不



① 可欠なこの第三者を第一次鑑賞者とする。彼らは、絵画それぞれに対して評価をするわけだが、この評価が作品の見方や、極端に言えば、去就・存亡に関わる場合もあっただろうと推察する。この段階を第二とする。筆者は更に、身分・経歴・生活環境の異なった識字階層の人々（第二次鑑賞者とする）が作品に対して、ある者は第一次鑑賞者の影響を受け、ある者は作品の画題から連想し、ある者は自身の立場を作品の登場人物などとだぶらせる等の心境を表現するといった形で、感想の詩文や記録文^④を作成していったことを考慮に入れ、それを第三段階として設けるのである。

さて、以上の各段階を意識しながら、モデルケースとして李公麟画「白蓮社図」を取り上げて進めたい。

二、作者李公麟について

李公麟（一〇四九？〜一一〇六？）の基本的な伝記資料としては、『宣和畫譜』巻七^⑤や『宋史』巻四四四を使用されることが多い^⑥。ここでは、よくまとめて書かれている後者の資料に、前者・その他の資料を補うかたちで簡単な伝記をまとめておきたい。

李公麟、字伯時、舒州人。第進士、歷南康長垣尉、泗川録事參軍。用陸佃薦、爲中書門下後省刪定官、御史檢法。好古博學、長於詩、多識奇字。自夏商以來鐘鼎尊彝、皆能考定世次。辯測款識、聞一妙品。雖捐千金不惜。紹聖末、朝廷得玉璽。下禮官諸儒議、言人人殊。公麟曰、秦璽用藍田玉、今玉色正青。以龍虬鳥魚爲文者。帝王受命之符。玉質堅甚、非昆吾刀蟾肪不可治。珣法中絶、眞秦李斯所爲不疑。議由是定。元符三年、病瘳。遂致仕、既歸老、肆意於龍眠山巖壑間。雅善畫、自作山莊圖、爲世寶傳。寫人物尤精。識者以爲顧凱之・張僧繇之亞。襟度超軼、名士交譽之。黃庭堅謂其風流不減古人。然因畫爲累。故世但以藝傳云。

〔宋史〕卷四四四

(一) 士大夫の経歴

李公麟（字は伯時）は、舒州（舒城とも。現在の安徽省廬江県）の人である。鄧椿（宋代）『畫繼』^⑦によれば、舒城の名家で「世、儒を業とする」^⑧とある。父は虚一といい、賢良方

正科・大理寺丞などに任ぜられ、左朝議大夫を送られている。法書・名画を収集するのが趣味であったこの父に、公麟も影響を受けていることを、『宣和畫譜』⁹は記している。

李公麟の進士及第は、『畫繼』によれば、熙寧三年（一〇七〇）で、南康（江西省）・長垣（河南省）尉（警察官・軍事官）、泗川録事參軍（泗川とは泗水のこと。泗水は山東省から江西省へと流れる。録事參軍は郡の主簿）を経て、陸佃¹¹（未詳。陸游の祖父）に任用されて中書門下後省刪定官・御史（台）検法（官）となる。『畫繼』では「朝奉郎」に昇進したとある。『宣和畫譜』が記すように「文臣」文官であった。元符三年（一一〇〇）に「瘕」（リユーマチとされている）を患い、崇寧五年（一一〇六）に退職し、龍眠山（安徽省桐城の西北）に隠居するまで、三十六年の士大夫生活であった。

この間に、多くの知人ができたに違いない。『宋史』には黄庭堅（一〇四五～一一〇五）の名が挙がっているが、その他に、蘇軾（一〇三六～一一〇一）・轍（一〇三九～一一二二）兄弟、当時四学士と称されたという張耒¹³（一〇五四～一一一四）ら、有名人との交友関係が資料によって裏付けられる¹⁴。また引退後、李公麟は龍眠居士と名乗ったが、同じく龍眠の号を使った李亮功（工）・李冲元の二人がある。亮功は公麟の弟、冲元は従兄弟¹⁶と思われる。三人併せて「龍眠三季」と呼ばれたという。

（二）文化人としての経歴

『宋史』によれば、李公麟は「好古博學、長於詩、多識奇字」であった。彼が詩に長けていたことを、『宣和畫譜』では、王安石（一〇二一～一〇八六）が公麟の作った四詩を称賛したことを例に、公麟の文章には建安の風格があるとしている¹⁸。曹樹銘氏は論文で、張耒『張右史文集』より公麟の詩を抜粋し、提示している¹⁹。加えて書についても、『宣和畫譜』は「書体は晋宋間の人のようだ」と述べる。公麟直筆の書及び彼の書家としての才能については曹氏の論文にくわしいので、これに譲る²⁰。

また、夏・商時代以来の鐘・鼎・尊・彝を考証し、収集には千金も惜しまなかったとある。紹聖（一〇九四～一〇九七）末に、玉璽の鑑定をしたことは、李公麟を更に有名にしただろう。彼の古器鑑定ガイドブックともいえるべき「考古圖」²¹五卷は、鈴木敬氏によれば、徽宗時代の「宣和博古圖」²²の原型である。鈴木氏の指摘するように「北宋末は古器物に対する関心が異常に高まった時であった」²³ならば、李公麟は、当時の流行の教養を具えた知識人・文化人だったといえよう。

（三）画家としての経歴

『宋史』李公麟章の後半は、画家としての彼を簡略に紹介している。代表作として挙げられた「山莊圖」は、李公麟の隠居先を描いたといわれる²⁴。「爲世寶傳」とされる同図は現

在台北の故宮博物院とイタリアのヴィラ・イ・タッティに一点ずつ「伝李公麟」として保存されている。

『宋史』にあるように人物画をよくしたのは、李公麟伝が『宣和畫譜』の「人物門」に分類されていることからもうかがえる。『宣和畫譜』中の画家伝は、他の伝記資料に比べて長く、特に人物画家としての記述に重きを置いているように思える。幼い頃から名画を見て育った公麟は、顧凱之・陸探微・張僧繇・吳道玄といった有名画家の作品を模写することで腕を磨いたという²⁵⁾。

『宣和畫譜』の編纂者は、公麟の人物画の中でも故事に関する作品を重視していた。陶潜を描いた「歸去來兮圖」・王維の「陽關圖」や、「山莊圖」は王維の別荘を描いた「輞川圖」に対抗して描かれたと解釈している。²⁶⁾この現象は、おそらく画家伝末尾の作品リストに故事を題材にした人物画が多いこと、つまり徽宗所蔵の李公麟画は、このような故事図が多かったことが原因となっているのではないだろうか。²⁷⁾

リストの中には、数点の道釈画と大量の馬の絵が挙がっている。その数量に比例してか、本文中道釈画を描く公麟についての記述は、「謂わく、華嚴会の人物は地獄変相に對してとするべし。」²⁸⁾の一文と、最初は馬ばかり描いていた公麟に「道人」が「馬ばかり描いていると馬(の胎内)に入つてしまふぞ」とおどかさされて、道仏を描くようになったという記

述があるのみである。公麟の馬図は、人物画よりも有名であった。画馬の名手、韓幹を学んだ公麟は「宣和畫譜」に「先以畫馬得名」とある。徽宗の収集品に公麟の馬が多いのは、世間の公麟評を反映しているといつてよいだろう。なかでも、第二次世界大戦で焼失してしまったものの、コロタイプや写真等にその姿をうかがうことができる「五馬圖」は李公麟真筆と評価されている。

しかし、残念ながら本稿で話題とする「白蓮社図」は『宣和畫譜』のリストにない。さきの『畫繼』や、周密(一二三二〜一二九八)の文物所蔵記録書『雲煙過眼録』³¹⁾、南宋孫紹遠の題画文学集成『聲畫集』³²⁾にも、その名を見出せないことからして、当時のメジャー作品でもなさそうである。それは現在においても同じようである。「白蓮社図」を取り上げた論文を、筆者は滅多に見かけない。ただし、先行論文の検索・検討が不十分であることも否めず、よって論旨に不確定要素が少なくないのは、反省するべきところである。

三、白蓮社図の歴史

「白蓮社図」は、しばしば「蓮社図」と呼称される。東晋時代の廬山慧遠が起こした浄土教結社の様子を描写した作品で、李公麟がはじめてこの画題を取り上げたようだ。³³⁾横軸に十八賢人と呼ばれた宗炳・曇順・道生・雷次宗・道敬・曇

誥・劉程之・張詮・慧叡・慧持・慧永・曇恒・道昺・周續之・跋陀羅・耶舍・張野・慧遠と、陸道士(脩静)・捕蛇翁・陶淵明・謝靈運の四人の計二十二名、数名の童子・使用人、猿・ノロといった動物、そして文殊菩薩像が描かれていた様子は、李冲元(未詳)「元中記」⁽³⁵⁾にくわしく記載され、鑑定や別体裁の制作に一役買っていたと考えられる。

現存する「白蓮社図」のうち、筆者が図録より探し得た作品は三点⁽³⁶⁾あるが、いずれも写真のみの管見であるので存在を記すに止める。またこれ以降、筆者が李公麟「白蓮社図」を論じる場合は、李冲元が見、記録したと考えられる体裁の図を指している。

絵画作品の歴史を、前述のとおり三段階と考える筆者は、白蓮社図についても同様の段階を想定している。つまり、李公麟が白蓮社図を描いた時点の環境を第一段階、白蓮社図を直接受け取った李冲元の状況を第二段階、そして時を経てもお鑑賞する人々の様子を第三段階と位置づけて、話しを進めたい。

(一) 白蓮社の故事と「白蓮社図」

白蓮社といえば浄土教結社であり、廬山慧遠を始祖とすることは周知のとおりである。しかし、慧遠の結社設立からしばらくの間、「白蓮社」なる社名を見ることはない⁽³⁷⁾。湯用彤氏は『漢魏兩晉南北朝佛教史』⁽³⁸⁾上に「中唐以後にみられ

るようになり、宋代には蓮社の名の解釈がわかれるようになった」として戒珠(九八五〜一〇七七)の『浄土往生傳』⁽³⁹⁾序文

生而生者、宝幡爲之前導、金蓮爲之受質。於是相與而有蓮社之想焉。今之以蓮社云云、蓋其始也。

や、道誠の『釋氏要覽』卷上 住処章の⁽⁴⁰⁾

蓮社 昔晉慧遠法師^{唐宣宗諡大覺法師}雁門人。住廬山虎溪東林寺。招賢士劉遺民・宗炳・雷次宗・張野・張詮・周續之等爲會修西方浄業彼院多植白蓮。又彌陀佛國。以蓮華分九品次第接人故稱蓮社。有云。嘉此社人不爲名利淤泥所汚。喻如蓮華故名之。有云。遠公有弟子名法要。刻木爲十二葉蓮華。植於水中。用機関。凡折一葉是一時。與刻漏無差。俾礼念不失正時。或因此名之。又稱浄社。即南齊竟陵文宣王。募僧俗行浄住法故。

から、宋代の蓮社の語義を解釈している。語義解釈については言及を避けるが、この二点の資料や、小笠原宣秀氏⁽⁴¹⁾や野上俊静氏⁽⁴²⁾が取り上げる贊寧(九三〇〜一〇〇二)『大宋僧史略』⁽⁴³⁾卷下 結社法集の、

晉宋間有廬山慧遠法師。化行潯陽。高士逸人輻湊于東林。皆願結香火。時雷次宗・宗炳・張詮・劉遺民・周續之等。共結白蓮華社。立彌陀像。求願往生安養國。謂之蓮社。社之名始於此也。

から伺えるように、北宋も十世紀には確実に、しかしようや

く慧遠の結社が「蓮社」であることが定着したのである。

それでは、結社のメンバーについてはどうだろうか。実は、李公麟が知っていた結社の中心人物である十八賢人も結社当時のメンバーでないことは、鎌田茂雄氏の『出三蔵記集』の慧遠伝では、彭城の劉遺民・雁門の周統之・新蔡の畢頴之、南陽の宗炳の四人の名があげられ、『高僧傳』の慧遠伝では彭城の劉遺民・予章の雷次宗・雁門の周統之・新蔡の畢頴之、南陽の宗炳・張萊民・張季頴などの名をあげている。』という指摘からも明らかである。慧遠の結社当時、共にあった劉遺民(程之)の誓文は、百二十三人の社員があつたことのみ記録している。『出三蔵記集』や『高僧傳』のメンバーを引き継いでいる宋代の文献は、『浄土往生傳』である。卷上 釋慧遠章には、

彭城劉遺民・豫章雷次宗・雁門周續之・新蔡畢頴之、南陽宗炳・清河張野、並棄世遺榮、依遠遊止。遠與遺民而下僧俗一百二十三人、結爲浄社。於彌陀像前、建誠立誓。期升安養。仍令遺民撰文以刻之。當時或稱蓮社。

とあり、特に「新蔡畢頴之」なる人物が共通して記されているが、李公麟の「白蓮社図」に描かれていないことは、「元中記」より明らかである。

「白蓮社図」に描かれていた十八賢人の、特に僧侶以外の顔ぶれにほぼ近いのは、『大宋僧史略』の「雷次宗・宗炳・

張詮・劉遺民・周續之等」、『釋氏要覽』の「劉遺民・宗炳・雷次宗・張野・張詮・周續之等」である。おそらく、この両書によつて十八賢人の顔ぶれは確定しつつあつたと考えられる。ただし、以上の資料のいずれも「十八賢」についての記述ではない。つまり、白蓮社の十八賢人の故事は完全に成立したとはいえないのである。

しかし、李公麟は慧遠の結社が(白)蓮社であり、併せて十八賢人を意識して図を描いている⁽⁴⁷⁾。では、情報源はどこか。この検討は、白蓮社図成立の直接的な要因の探究のためなのはもちろん、図を描く際の、李公麟の環境を推察する上で必要と考える。

(二) 白蓮社図の情報源①

李公麟は、何に基づいて白蓮社図を描いたのか。結論からいえば、陳舜愈『廬山記』卷三「十八賢傳第五」(以下「十八賢伝」)か、同書序文に指摘された「舊十八賢傳」(以下「旧十八賢伝」)が最も近いのではないかと考える。

「十八賢伝」は、その表題どおり十八人の賢人が以下の順序で並べられて『廬山記』に収められている。

社主遠法師・彭城劉遺民(程之)・豫章雷次宗・雁門周續之・南陽宗炳・南陽張野・南陽張詮・西林覺寂大師(慧永)・東林普濟大師(竺道生)・釋慧持法師・罽賓佛駄耶舍尊者・罽賓佛駄跋陀羅尊者・釋慧叡法師・釋曇順法師・釋曇恒

法師・釋道昂法師・釋道敬法師・釋曇詵法師

社主慧遠を除く前半に文人、後半に僧侶という配置には陳氏の意図があつたかもしれないが、その件に関しては今回ふれない。李公麟の蓮社図は、「元中記」に基づけば、『廬山記』中の十八賢人のメンバーとすべて一致する。

蓮社図の情報源確定において、もう一つの条件は「白蓮社」「蓮社」という単語の有無である。「十八賢伝」には大抵の場合、慧遠の浄土教結社という意味であろう「遠公浄社」や、浄土教結社という意味の「浄土之社」と表記されている。「蓮社」という言葉はただ一つ、釈曇詵法師章の末尾に「注維摩経、著窮通論・蓮社録。」とあるのみである。

さて、十八人の賢人名と唯一とはいいながらも「蓮社」の言葉のある「十八賢伝」は、李公麟の情報源の条件にかなっている。しかし、同書とは確定しづらい問題点が二つある。

一つは、『廬山記』の成立年と出版時期である。同書成立は李常（一〇二七〜一〇九〇）の序文⁵⁰より熙寧五年（一〇七二）であることがわかる。

余昔者讀書山中。愛其泉石塔廟之。志之不詳遺古略近。或出於愚夫野老之語。言□辭贅。可取者無幾。將討論刪次之。未暇也。後二十年。讎書秘閣得廬山記。欣然以喜。以爲夙願獲遂。而考其所載。疏略尤甚。熙寧五年。嘉禾陳令舉舜愈謫官山前。酷嗜遊覽。以六十日之力。盡南北高深之前。晝行山

間。援毫折簡。旁鈔四詰。小大弗擇。夜則發書攻之。至可傳而後已。其高下廣狹。山石水泉。與夫浮屠老子之宮廟。逸人達士之居舍。廢興衰盛。碑刻詩什。莫不畢載。而又作俯視之圖紀。尋山先後之次。泓泉塊石。無使遺者。成書凡五卷。後三年。余守吳興。令舉扁舟相過。以余山前之人也。出藁見授。請鏤諸板。藏之山間。會余蒙恩移濟南。遽與之別。令舉尋復物故。余益以事役。奔走四方。思一旋歸。茫不可得。輒序其撰述之勤貽。好事君子。庶幾成令舉之志
充秘閣校理李常序

「蓮社図」が描かれたのは、「元中記」によれば、元豊庚申（二〇八〇）十二月〜翌一月である。その差八年。李公麟が同書を見ることができたか、微妙なのである。この序文によれば『廬山記』成立後三年、李常が吳興（現浙江省呉興県）に居たとき、陳氏が開版を頼んだが、李氏はまもなく濟南（山東省歴城県）へ移動し、そのうち陳氏が亡くなる。李氏は開版の責を果たそうとしたが、結局果たせず、「好事君子。庶幾成令舉（陳舜愈）之志」と結んでいる。李常は王安石（一〇二一〜一〇八六）の新法（一〇七〇）に反対して左遷されている。この序文は少なくとも、熙寧五年の三年後（一〇七五）に書かれているから、おそらく流罪の最中であろう。いくら陳氏の頼みとはいえ、同書の開版の労を取る術がなかったのではないだろうか。李常在世中に開版が成らなかつたならば、李公麟が同書をみることは限りなく不可能に近い。

『廬山記』の内閣文庫影印本解説に、

この本は、本文中、「桓」字を「犯淵聖御名」に作っている
ので、徽宗生存中の南宋初年刊本であることがわかる。けだ
し、本書の第一次刊本であろう。

とある。もし解説が正しければ、李公麟が同書を閲覧した可
能性はなおさら低い。

陳舜愈は、「十八賢伝」序文に、「旧十八賢伝」の存在を記
している。陳氏は廬山に退居後、同じく廬山に隠居していた
劉渙と知り合い、昼は山間を歩き回り、夜は劉氏の収集して
いた廬山に関する書物をまとめた。これは李常の序文と並ん
で書かれた劉渙本人の序文⁽⁵¹⁾からも明らかである。おそらく、
この「旧十八賢伝」も劉氏収集書の一であったのだろう。

「十八賢伝」序文⁽⁵²⁾には「誰が作ったものか知らないが、文
章が浅はかで俗っぽく、歴史を踏まえると往々にして間違い
があるので、読者はこの本をいやしめるだろう。折角の古人
の実績がもつたいない。」と伝記作成の理由が述べられてい
る。しかし、鎌田氏や松本文三郎氏⁽⁵³⁾らが検討していると
おり、十八人のうち歴史的にいっしょに結社内にしたことが不
自然である人物が存在する。つまり、陳氏は十八人の時間的
関係を見直したというより、むしろ各人の伝記中の誤りを正
したに過ぎないと考えた方が自然である。

そこで問題となるのは、さきほどの曇詵著書中の「蓮社

録」である。慧皎（四九七〜五五四）の『高僧傳』巻六「釋
道祖」伝中⁽⁵⁴⁾に、曇詵について、

（慧）遠又有弟子曇順・曇詵。（中略）詵亦清雅有風則。注維
摩及著窮通論等。

の記述があるが、「蓮社録」は記載されていない。「十八賢
伝」中、著作を残したと記される人物は、曇詵と『匡山集』
二十巻を著した慧遠の二人だけである。陳氏が参照した劉渙
の書物中に『蓮社録』なる本があったのか、またはその本が
市中に出回っていたのか、それとも「旧十八賢伝」中にその
記載があったのか、さらに疑えば、「蓮社」の言葉が一つも
出てこない「旧十八賢伝」に、陳氏が最後の最後に付した、
いわば情報操作だった可能性もある。いずれにしろ、「旧十
八賢伝」の存亡と成立時期、そして『蓮社録』なる書物の搜
索が問題解決の手だてである。ただし筆者の推測を述べれ
ば、『蓮社録』は陳氏が付したものであって、「旧十八賢伝」
には記載されていなかったのではないかと思うのである。陳
氏執筆当時に『蓮社録』が存在していたとしても、恐らく撰
者の明白でない書物だったに違いない。「蓮社」が慧遠の結
社であることは、当然、陳氏も了解している。それならば、
十八賢人のうちの誰かが書いたことにしなければならぬと
考えるだろう。十八人のうち、著作を残したと記載される人
物は二人。うち慧遠は破格の有名人である。筆者が陳氏なら

ば無難に、伝記が慧遠ほど認識されていない曇詵に仮託するだろう。また、仮に存在していなかったとしても、「十八賢伝」と「蓮社」を結び付けるために必要なアイテムだったのではないだろうか。

いずれにしても、李公麟の閲読したであろう十八賢人の伝記には、慧遠の結社は基本的に「遠公浄社」や「浄土之社」と記されていたのは明らかである。しかし、李公麟の描いた図が「蓮社図」と命名されているのも事実である。これについて、李公麟にとっての「白蓮社」の故事は、仏教説話や浄土教信仰のシンボルとしてよりも、知識・教養の一つだったのではないかと、筆者は解釈するのである。もっと分かり易くいえば、「慧遠の結社＝蓮社＝十八賢人の住処」の図式を疑いなく把握していたことは、つまりこれが李公麟にとっての「正しい知識」だったと考えられるのである。

(三) 白蓮社図の情報源②

「本稿の目的」において、小川氏の説を引用したが、李公麟にとって「白蓮社図」を描くきっかけとは何だったのかを、次に考えてみたい。これによって「白蓮社図」成立の遠因となる情報が見えてくるからである。

公麟がこの絵を描く数十年前、神照本如(九八二〜一〇五〇)が営む結社に対し、仁宗(在位一〇二三〜一〇六三)より「白蓮社」の称号が贈られている。⁽⁵⁵⁾ 李公麟が活躍した当時は、

本如の弟子処譲らが結社を引き継いでいた。実際、この結社にどれほどの影響力があったのか筆者の管見の及ぶところではないが、浄土教は天台をはじめ禅や律といった北宋後期の仏教学の主流に少なからぬ影響を与えたことは、従来の研究成果より明らかである。また、それには仏教者ならずとも影響を与えられたはずで、宋代浄土教関係の研究書・概論書に多くの士大夫・文人の名が挙がっているから、ここで一々を論ずることはしない。そして、この影響は公麟にも例外なくあったことだろう。さらに、それは「蓮社」を画題として取り上げようと考えた一つの遠因であったにちがいない。

「白蓮社」の故事が北宋代に注目されたのは、慧遠像の再評価という動きだったのかもしれない。(ただしこの件に関しては、いましばらくの検討を要するので、ここでは保留とする。)しかし、李公麟には慧遠を注目するもう一つの理由がある。それは、公麟の家柄に係る。

張澂(未詳)は一説に公麟の甥とされている。⁽⁵⁶⁾ 著書『畫録廣遺』⁽⁵⁷⁾には、公麟の伝記が比較的くわしく書かれている。内容は、おおかた『宋史』や『宣和畫譜』から出ることはないが、気になる一節が見られる。それは、

李伯時人品如晉宋間人物。本江南李氏之遠族。

である。曹樹銘氏は、この「江南李氏」の呼称は五代南唐の李後主煜の言葉と伝えられていることを示している。⁽⁵⁸⁾ 張澂よ

り若干年下であろう、周必大（一一二六～一二〇四）の『文忠集』⁽⁵⁹⁾巻四十九「題鞠城銘」には、

李公麟字伯時、堂弟彙字德素、南唐李先主昇（正しくは昇）四世孫。

とある。

李公麟が南唐李氏の末裔であるならば、慧遠と深い関係がある。慧遠にはいくつかの諡がある。『佛祖統紀』巻二六⁽⁶⁰⁾を参照すれば、

唐宣宗大中二年、追諡辯覺大師。昇元三年追諡正覺。南唐李先主年号。即晉高祖天福四年也。 大宋太平興國三年追諡圓悟大師凝寂之塔。

とある。つまり、公麟の祖先は慧遠に追諡していたのである。いうまでもなく、家意識の強かった漢民族の性質において、慧遠の追諡は李公麟に少なからぬ意識を向けさせたのではないだろうか。

「白蓮社図」成立の遠因を考える上で、もう一つ考えなければならぬのは、「白蓮社図」には、二十一人の登場人物、即ち十八賢人とさらに四人描かれていることである。この四人とは、謝靈運・陶淵明・陸脩静・捕蛇翁である。（ただし、残念ながら捕蛇翁は特定できない。）

陳舜愈「十八賢伝」には、謝靈運が慧遠章に、陶淵明が周続之章に登場するが、陸脩静・捕蛇翁はみえない。「白蓮社」といえば十八賢人と考えていたのならば、他の四人を付す必

要はないはずだ。では、何故彼らを登場させる必要があったのだろうか。

謝靈運・陶淵明は、李公麟が活躍したころ、特に文芸面で再評価されていた。四六駢儷体の見直しをスローガンとする古文復興運動である。塩谷温氏の『中国文学概論』⁽⁶¹⁾によれば、古文と駢儷は主導権争いを繰り返してきた。「字句・声律の拘束を受けない自由自在の散文」である古文と、「声律を調べ対語を排した」「美文辞」である駢儷は、その特徴を最大限に発揮したとき、それぞれの弊害を指摘されるという歴史を持っている。李公麟在世当時も、まさに文体改革の最中であつた。蘇軾は「潮州韓文公廟碑」の中で「文は八代の衰を起す」といった⁽⁶²⁾。八代とは後漢から唐に到るまでを指す。この間、魏の建安七子⁽⁶³⁾に代表される四六駢儷体の全盛だつたとされている。この時流の中で、古文を守り抜いたと評価されたのが陶淵明などだつた。蘇軾以下、後にいわゆる唐宋八大家と呼称される当時の文章家達の理想こそ、陶淵明や謝靈運だつたのである。文章を武器として、政治世界に生き残りをかける士大夫達の理想像である陶淵明や謝靈運が、政界から脱落し田園に身を置いて山水と酒を愛した自由人だつたのは、偶然ではないだろう。彼らの人物像に思慕していたのが、李公麟ら北宋の士大夫だつたのである。⁽⁶⁴⁾

陸脩静（四〇六～四七七）は、道士でありながら慧遠との

交流を伝承された人物である。慧遠が老壯に通じていたことから生まれた組み合わせだが、史実としては無理がある。⁶⁵ 陶淵明と慧遠と陸氏が虎溪で大笑いしている「虎溪三笑図」は、李公麟とほぼ同時代に生きた石恪（未詳）を始めとする説もあるが、通常この絵は儒・仏・道の三教融合の象徴と理解されている。⁶⁶ それでは、「白蓮社図」における陸氏はどのような意味を示しているのか。「元中記」によれば、

前有僧與道士、相促而咲者、遠公送陸道士過虎溪也。

とあり、二人で笑っている場面となっていて三教とはいえない。この辺りが、李公麟の「白蓮社」の物語に対するスタンスと捉えられるかもしれない。すなわち、宗教的な題材を扱いつながら仏教徒だけを描くわけではなく、かといって三教融合というような立ち入った議論を意識していたわけでもない。つまり、李公麟は「白蓮社図」を描く上での情報を、宗教的というよりはむしろ物語と理解しているにすぎないと考えるのである。

(四) 「白蓮社図」の第一次鑑賞者とその影響

さきほどより触れている「元中記」の作者李冲元は、「白蓮社図」の第一次鑑賞者である。「元中記」を読めば「白蓮社図」がどのように描かれているかが手に取るようになる。⁶⁷

李冲元は「元中記」に、

龍眠李伯時、爲余作蓮社十八賢圖。追寫當時事、按十八賢行状。

とし、公麟が冲元のためにこの図を書いたと記している。冲元はこの図をもらうと、

余得之、遊居寢飭其下。客來觀者、或未知蓮社事、因記其後。覽者當自得之也。

と記して、その喜びの大きさを示した。更に、

・爲此圖凡三十八日而成。

・圖成于元豊庚申十二月二十五日、越明年辛酉正月二十六日。

と記していることから、この図の作成現場を見、李公麟より直接得ている可能性は高い。またその喜び様からすると、冲元が公麟にリクエストしたのではないかとさえ、思えてくる。いずれにせよ、冲元は「白蓮社図」完成直後の鑑賞者である。

第一次鑑賞者の影響は大きい。特に模写と鑑定、そして元中記の記述を元にした作画の三点においてである。

崇寧年間（一一〇二～一一〇六）前後に活躍した李昭玘の『楽静集』巻九に「跋孟仲寧畫蓮社圖」の文章がある。⁶⁸ 冒頭には、

舒城李伯時作蓮社圖。士大夫傳以爲佳玩謂可與輞川並馳。顯川晁无咎復得遺意頗加損。蓋集古名筆以繕工孟仲寧爲之。

と記されており、晁无咎が孟仲寧に模写させたらしいことが伺える。晁无咎とは晁補之⁽⁷⁰⁾（一〇五三〜一一一〇）のことで、李昭玘ともつながりがあり、かつ李公麟とも面識があったようである。晁氏は『无咎題跋』に「題白蓮社圖後」として、

孟仲寧獨善學知余得意

と記し、孟仲寧の作品に晁氏の意が表れていることを示している。この晁氏の「意」を、李昭玘は李公麟の遺意と解釈しているようだ。

「元中記」を鑑定に使ったのは、樓鑰⁽⁷³⁾（一一三七〜一二一三）である。著書『攻媿集』⁽⁷⁴⁾巻七十二には、「跋朱叔止所藏書畫 龍眠蓮社橫卷」として、

余得蓮社圖。高三尺橫二尺、筆力精勁、五彩煥發、妙絶一世、龍眠眞筆也。此爲橫軸大略相似。時有不同元中之記。去（書カ）童子蹲而汲水者一人時有二。書猿一疊一而猿亦有二疊則鹿也。元中書甚工、既非其親書、疑別爲一圖作記。余所藏、童子汲水及猿皆一而疊則鹿也。龍眠爲此圖妙意非一。自知愛重或縱或橫意。必有數、今恨未能盡見也。此卷謝康樂不爲長鬣、捕蛇翁亦欠朴意之狀。必有能辨之者。

という跋文が収録されている。この中で樓氏は、李公麟の絵が一つとは限らない可能性を指摘し、「蓮社図」が複数存在していることを示している（傍線部）。樓氏が見た「蓮社図」が李公麟の真作かどうか定かではないが、「元中記」が「蓮

社図」鑑定の基準となっていたことは明らかである。

また、「元中記」によって作画される例としてはまず、続藏所収『東林十八高賢傳』⁽⁷⁵⁾巻頭の図⁽⁷⁶⁾が挙げられる。「元中記」には、どの部分から描写しているか明らかではなく、李冲元の目に留まったところから始まっているはずだが、続藏本は、左端から「元中記」の記述順通りに人物が並んでいて、「元中記」に沿って描かれているとしか考えられないほど条件は整っている。更に、日本の資料である長西⁽⁷⁷⁾（一一三四〜一二六六）の『浄土依憑経論章疏目錄』に、

廬山十八賢 賢下一本 有傳字 一卷附 龍眠唐人

とある。おそらく、『東林十八高賢傳』に類似した書物で、図が付されていたのだろう。『東林十八高賢傳』には執筆者らしい人名がないが、同書の編者もそれらしい人名が見つからなかったため、付随していた「元中記」にある「龍眠李冲元」という名前を（とりあえずかまたは誤解して）著者として記載したに違いない。

（五）「白蓮社図」の波及と第二次鑑賞者

「白蓮社図」は、画家李公麟のネームバリューと図の存在を知らしめた李冲元の「元中記」によって知られるようになった。そして、李公麟の真作如何に関わらず、図は各地で見ることができるようになっていった。

前述の樓鑰が、朱叔止の所蔵していた蓮社横卷を見た頃、

陸游⁽⁷⁸⁾（一一二五～一二二〇）は蜀で「白蓮社図」を手に入れている。

予在蜀得此二卷。蓋名筆規模。龍眠而有自得処。季子子聿手自裝褫藏之。慶元丁巳（一一九七年）中秋前三日 放翁識⁽⁷⁹⁾

こうした図の波及は、もはや画家の意図を考慮されない状況に陥らせる。鑑賞したこと、手に入れたことが、ある意味ステータスとなり、画家や作品の真贋さえも考えられなくなる。かわって生まれるのが、鑑賞者の自由な感想である。識字層はこれを題画文学の形で遺している。つまり、「白蓮社図」のファンの数だけ題画詩文は残っているわけである。こうした鑑賞者を第二次鑑賞者と位置づける。

紙幅の関係上、「白蓮社図」に対する題画文学の内容の検討は次の機会に譲ることにするが、現在までに探し当てられた文章の題名を列記しておこうと思う。

・鄭景望（南宋）『蒙齋筆談』文中
・宗暁（一一五一～一二一四）『樂邦遺稿』に「廬山蓮社圖記」

・北磻居簡（一一六四～一二四六）『北磻文集』に「跋蓮社圖」

・物初大觀（一二〇一～一二六八）『物初贖語』に「蓮社圖」
・無文道燦（～一二七二）『無文道燦禪師語錄』に「題蓮社圖」

特に、北磻と彼に親しい物初・無文が同じ図に詩文を作成しているあたりは興味深いところである。筆者は、まず彼らを禅僧というカテゴリーで縛るのではなく、「白蓮社図」の一ファンとして捉えていきたいと考えている。そして、いったいどのような思想で同図を見ていたのか、鄭氏や宗暁などと比較しつつ把握してみたい。

四、結論

普段、博物館や美術館の展示でみるキャプションは、何に基いて書かれているのだろうか。この疑問が絵画を研究材料とした、筆者のそもそもの契機である。

ある作品の歴史を成立時点まで遡るのは、極めて困難である。何故ならば、画家自身が作品に対してコメントするのは、宋代においては、少数だからである。では、現在筆者を含む鑑賞者が目の当りにする絵画史の大部分は、鑑賞者の築き上げた歴史なのではないだろうか。

李公麟によって描かれたことは「白蓮社図」の歴史の第一ページである。この図が、以降描かれる他の図に対して与えた様式的な影響を検討するのは、絵画史の重要事項であろう。しかし、図に対する鑑賞者の様々な解釈が、複数（または複数種）の作品を生み出し、次世代の絵画作品や画家、鑑賞者に影響を与えているという歴史も一方に存在する。筆者

が冒頭で述べた社会的・文化史的見地とは、こうした考えより提示した方法論である。

このように考えれば、例えば牧谿や梁楷の作品が「禅的」と捉えられるようになったのは、いつ頃からなのかを検討できる。それは「絵画」と「思想」の接点を明らかにしていく作業なのである。

註

- (1) 『東洋の美術Ⅰ』中国・朝鮮（昭和五十二年 旺文社）二〇〇頁より引用。
- (2) 王伯敏著・遠藤光一訳『中国絵画史事典』（平成八年 雄山閣出版）二一八～三二二頁参照。
- (3) 小川裕充氏「山水・風俗・説話―唐宋元代中国絵画の日本への影響」冒頭部分（上原昭一・王勇編『日中文化交流史叢書7 芸術』二～五〇頁 一九九七年 大修館書店）
- (4) このような感想の詩や文、記録文はまとめて「題画文学」と呼ばれる。青木正児氏「題画文学の発展」（『支那学』第九卷第一号 昭和十二年）で注目された。宋代の題画文学については、拙稿「南宋代の臨済僧による絵画解釈について」（『禅文化研究所紀要』第二十三号 一九九七年 禅文化研究所）同「宋代における蓮社図の受容について」（『印度学仏教学研究』第四十七卷 平成十年）において検討している。

(5)

『宣和畫譜』は、編纂者不明。北宋徽宗皇帝の所蔵画目録で、道釈門・人物門・宮室門・蕃族門・龍魚門・山水門・畜獸門・花鳥門・墨竹門・蔬果門の十部門に分け、画家の得意分野によって振り分けられている。本文には、画家伝と作品リストが併せて掲載される。卷七人物門の李公麟伝は他の画家に比べて長く書かれ、作品リストには

- 寫大梵天像 二・不動尊變相 一・觀音像 三・華嚴經相 六・維摩居士像 一・禪會圖 一・揭帝神像 一・護法神像 五・瑞像佛 一・金剛經相 一・無量壽佛像 一・釋迦佛像 一・菩薩像 一・緇衣圖 一・寫王維看雲圖 一・寫義之書扇圖 一・寫王維歸嵩圖 一・寫王維圖 一・山莊圖 一・歸去來兮圖 二・四皓圍碁圖 一・寫摩耶夫人像 一・親近菩薩像 二・寫十國圖 二・寫盧鴻草堂圖 一・蔡琰還漢圖 一・寫職貢圖 二・書裙圖 一・陽關圖 一・織錦回文圖 一・女孝經相 二・玉津訪石圖 一・寫三石圖 一・寫生折枝花 二・天育驃騎圖 一・昭君出塞圖 一・五王醉歸圖 一・寫玉蝴蝶圖 一・遊騎圖 一・醉僧圖 一・孝經相 一・玻璃鑑圖 一・杏花白鷗圖 一・寫唐九馬圖 一・姑射圖 一・參龍氏圖 一・御風真人圖 一・小筆遊戲圖 一・弄驕人馬圖 一・二馬圖 一・寫韓幹馬圖 二・北岸贈行馬圖 一・天馬圖 一・呈馬圖 一・習馬圖 一・馬性圖 一・調習人馬圖 一・寫東丹王馬圖 一・人馬圖 二・番騎圖 一・

九歌圖一・祖師傳法授衣圖一・寫摩奴舍夫人像

一・彌陀觀音勢至像 一・五星二十八宿像 一・寫十

大弟子像 十・摸吳道元護法神像 二・摸唐李昭道海

岸圖 一・摸吳道元四護法神像 四・摸唐李昭道摘瓜

圖 一・王安石定林蕭散圖 一・丹霞訪龐居士圖

一・寫徐熙四面牡丹圖 一・摸北虜贊華蕃騎圖 一

の各作品があげられている。内閣文庫所蔵本参照。

(6) 曹樹銘氏「李龍眠之研究」(『大陸雜誌』第四十卷 第

七、八期合刊 一九七〇年 大陸雜誌社) や鈴木敬氏

『中國繪畫史』上(昭和五十六年 吉川弘文館) 三〇八

〜三二四頁 李公麟章など参照。

(7) 『畫繼』は、『歷代名畫記』、『圖畫見聞誌』を継承して

作られた絵画史論で、書名はここに由来する。一一七〇

年成立。北宋熙寧七年(一〇七四)から南宋乾道三年

(一一六七)の画家の伝記を紹介している。著者鄧椿は、

生没年不詳で字を公寿といい四川の出身である。『叢書

集成 新編』第五三冊(一九八七年 新文豊出版公司)

所収。陶明君氏『中国画論辞典』(一九九三年 湖南出

版社) 参照。

(8) 『畫繼』卷三 李公麟章冒頭に、「龍眠居士李公麟字伯

時、爲舒城大族家。世業儒。」とある。

(9) 『宣和畫譜』卷七には、

文臣李公麟字伯時、舒城人也。熙寧中登進士第。父

虛一嘗舉賢良方正科、任大理寺丞、贈左朝議大夫。

喜藏法書名畫、公麟少閱視即悟古人用筆意、作眞行

書。

とある。

(10) 『畫繼』に、「公麟熙寧三年登第、以文學有名。」とあ

る。

(11) 陸佃の字は農師、号は陶山。徽宗の時に尚書右丞。六

十一才で亡くなる。著書に陶山集十六卷など多数。『宋

史』卷三四三。『宋人傳記資料索引』三(昌彼得ほか編

一九七八年 鼎文書局) 参照。

(12) 『畫繼』に「檢法御史臺官至朝奉郎。元符三年病痺、

致仕終於崇寧五年。」とある。

(13) 那珂通世著・和田清訳『支那通史』下(岩波文庫 一

九四一年 岩波書店) 一四四頁に「黃庭堅・秦觀・晁補

之・張耒の如き、元祐中、嘗て同じく閣に入る。世に四

学士と号す。」とある。張耒は、字文潛、柯山と号した。

元祐元年(一〇八六)に太学録の試験をうけて合格し、

弱冠三十二歳で秘書省正字となる。徽宗の頃には太常少

卿、潁汝二州の知事をした。詩文に長け、『兩漢決疑』・

『詩説』・『柯山集』などがある。『宋人傳記資料索引』三

参照。

(14) 黃庭堅や蘇軾の著作に、李公麟の名前はしばしば登場

するほか、張耒の『柯山集』にも多く見られる。前掲曹

氏論文二〇八頁等参照。なお、前掲鈴木氏論文三一〇頁

に、『邵氏聞見後録』を引用し、蘇軾左遷の際の李公麟

の冷たい態度について「どのように解すべきなのか」と

疑問を呈している。

(15) 亮功は字で李公寅という。伝記ははっきりしない。蘇軾が、亮功の旧宅を描いた李公麟の絵に文章を書いたり（「李伯時畫其弟亮功舊隱宅圖」）、黄庭堅が、亮功の所蔵する周昉の美人琴阮図に題を書いたことがわかっている（『宋人傳記資料索引』二参照）。

(16) 李冲元、字は元中。自著の「元中記」に「伯時與余爲從兄。實山林莫逆之友。」としているところから、從兄弟であることがわかる。元祐三年（一一〇八九）に登第。

(17) 「龍眠三李」は、陸佃『陶山集』卷二の「依韻和李元中兼寄伯時二首」に例がみえる。ただし、同文には三人のうち公麟と冲元の名はみえるがもう一人の名が出てこない。周必大（一一二六～一二〇四）の『文忠集』卷四九には「題鞠城銘」には「龍眠三友」として、公麟・冲元と堂弟（父方のいとこ）の李棗（字は德素）を挙げてゐる。李亮功と李棗の関係については検討中。『宋人傳記資料索引』二「李冲元」項には、冲元・公麟・亮工（功）を併せて「龍眠三友」としている。

(18) 『宣和畫譜』には
王安石取人慎許可、與公麟相從於鍾山及其去也。作四詩以送之頗被稱賞、考公麟平生所長其文章則有建安風格。

とある。建安は、西曆一九六～二二〇年。当時活躍していた曹操とその子丕・植のもとに孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨の七人の文人が集まり文壇の主力をなしていた。（建安の七子という。『漢語林』より）彼

らの確立した詩体は五言古詩で「建安体」と呼ばれた。これをふまえての記述であらう。

(19) 前掲曹氏論文第四章及び附録二を参照。この附録には『張右史文集』卷三七の四点の五言古詩、卷三八の四点の七言律詩、卷三九の七言絶句と卷四二の七言排律が抜粋されている。

(20) 李公麟の書法については、前掲曹氏論文第三章「李龍眠的書法」（二〇八～二一〇頁）にくわしい。

(21) 前掲鈴木氏論文三一～三二二頁にくわしい。

(22) 『宣和博古圖』五卷は、『善本類書叢刊簡介』（中華民国五二～六一年 新興書局）所収。

(23) 前掲鈴木氏論文三一頁より抜粋。

(24) 前掲曹氏論文第十七章「李龍眠畫山水」二四六頁に、「山莊圖」に対する李公麟の自序、

元豊紀号、歲在丁巳（一一〇七七）、月在涂、即買山於龍眠、以基以堂。

を引用している。同文の典拠が書かれていないので、筆者は未見であるが、これにより「山莊圖」は公麟の隠居先の風景と定められたのであらう。

(25) 『宣和畫譜』に、

始畫學顧陸與僧繇（ママ）道元及前世名手佳本、至礚礚胸臆者甚富。乃集衆所善以爲己有更自立。意專爲一家。若不蹈襲前人而實陰法其要。凡古今名畫得之則必摹臨蓄其副本。故其家多得名畫無所不有。

とある。

(26) 『宣和畫譜』に「龍眠山莊可以對輞川圖是也」とある。

(27) 註(5)参照。

(28) 『宣和畫譜』に「謂華嚴會人物可以對地獄變相」とある。

(29) 『宣和畫譜』に

公麟初喜畫馬、大率學韓幹、略有損增。有道人教以不可習、恐流入馬趣。公麟悟其旨、更爲道佛。

とある。これは、葉夢得(一〇七七〜一一四八)の『避暑錄話』巻下に

法雲圓通秀禪師爲言、衆生流浪傳徒、皆自積劫習氣中来。今君胸中無非馬者、得無與之俱化乎。伯時懼、乃教之使爲佛像、以變其意。於是深得。

とあることより、「道人」が法雲圓通秀禪師即ち法雲法秀(一〇二七〜一〇九〇)であることがわかる。なお、『避暑錄話』は『稗海』(三)(中文出版社)所収。葉夢得は字を少蘊、号を石林という。徽宗の時、翰林学士、高宗の時、戸部尚書に昇る。

(30) 註(5)参照。

(31) 周密の『雲煙過眼録』は絵画作品の追跡調査の報告のような書き方をされた資料である。『叢書集成 新編』第五〇冊を参照している。周密は字を公謹、号を草窗・蕭齋。また弁陽老人などとも。雲煙過眼録、武林舊事、癸辛雜識、齊東野録など多数の著書がある。『宋人傳記 資料索引』二参照。

(32) 孫紹遠『聲畫集』八巻は、淳熙丁未(一一八七)の自

序がある。唐宋人の題画の句を収録し、二十六門に大別して編集されている。四庫全書本巻頭の提要によれば、

編者孫紹遠についてはくわしくなく、「字は稽首、自署は谷橋であるが、谷橋とはこの地名かわからない」とある。前掲拙稿「南宋代の臨濟僧による絵画解釈について」参照。

(33) 北磻居簡『北磻集』巻七「跋蓮社圖」に「此圖之作始於龍眠李伯時」とある。

(34) 李冲元「元中記」に「度山逸邈而去、不知所窮。當圖窮処横爲長。」、また樓鑰『攻媿集』巻七十二に「跋朱叔止所藏書畫龍眠蓮社横卷」と題された跋文があることから、李公麟の蓮社図は横軸と考えられる。

(35) 「元中記」は正統藏第一三五冊所収の『東林十八高賢傳』一卷巻末に付された、李冲元による「白蓮社図」に対する記である。元中は李冲元の字なので、本来「元中記」と称するべきものではないかもしれないが、本稿では便宜上、上記のように呼称する。

(36) 現存する三作品は以下のとおりである。

① フリアギャラリー (Freer Gallery of Art) 所蔵 紙本水墨。高さ三〇・一センチ、長さ五九五・八センチ。巻末に、「元中記」と数人の題跋が付されている。筆者は、同図の真偽・伝承経路についての議論の有無をしない。『中國繪畫総合圖録』1 (鈴木敬編 東京大学出版会) 二二二、二頁参照。

② 南京博物院所蔵 模本として所蔵されている。絹本

着色。高さ九二センチ、長さ五三・八センチの縦長。註(34)のとおり、原図は横長であるが、「模本」と呼ばれるにも関わらず、なぜ縦に長く描かれているのかという疑問が残る。「模本」の語義設定を明白にする必要があると思われる。『中國美術全集』繪畫篇4 兩宋繪畫（下）（中國美術全集委員會編 文物出版社 一九九三年）図録編六四頁・解説編二〇頁参照。

③遼寧省博物館所蔵 明代まで李公麟の真筆と鑑定されてきたが、後に南宋の張激の「余嘗畫其圖、而未得此記。」という題記によって張氏の作品とされた。紙本水墨。高さ三五センチ、長さ八四九センチとこれも大型の作品である。『中國歷代芸術』繪畫篇（上）（中國人民美術出版社 一九九四年）図録二八〇、一頁・解説三五六頁参照。

(37) 小笠原宣秀氏『中国浄土教家の研究』（平楽寺書店 昭和二十六年）七頁に、「白蓮社の名称には充分の文献的根拠を認めることが出来ないので結成当時白蓮社と称したか否かと云ふ点については疑義を存してをる。」と述べられるとおり、結成当時の資料である劉遺民の「廬山精舎誓文」（『全晋文』卷一四二）にも「白蓮社」の名称はない。同様の指摘は、鎌田茂雄氏『中国仏教史』第二卷（東京大学出版会 一九八三年）三九二〜三九三頁にもある。

(38) 湯用彤氏『漢魏兩晉南北朝佛教史』（上）（商務印書館）三六八頁に

中唐以後、乃間見蓮社之名。貫休題東林寺詩云、今欲更從蓮社去。但至宋代蓮社之名、解釈仍紛岐。如宋戒珠『浄土往生傳』云、生無量壽國者、寶幢爲之前導、金蓮爲之受質、故名蓮社云。宋道誠『釋氏要覽』卷一載、蓮社之四義、四說不同。或以爲因東林院中多植白蓮。或以爲因彌陀佛國以蓮花九品次第接人。有云嘉此社人不爲名利所汚、故名。又有言遠公弟子法要以木刻蓮花十二葉。參看僧傳慧要傳。植水中、用機関、凡折一蓮是一時、與刻漏無異、俾禮念不失時、故有此名。

とある。

(39) 戒珠『浄土往生傳』序文は、大正蔵（以下、大）五一〇八c。『仏書解説大辞典』によれば、同書は九八四〜九八七年かそれ以降の成立と推定されている。戒珠は法性子光に学び、禪を法海懷要にうけた。『総合仏教大辞典』一六九頁（法蔵館 一九八七年）より。

(40) 道誠『釋氏要覽』卷上 住処章は大五四 二六三a。一〇一九年成立。本書は、出家者が僧団において生活していくのに必ず知っておかなければならないことを、二七項目とりあげ解説したものである。『岩波仏教辞典』（中村元他編 岩波書店 一九八九年）より。

(41) 前掲小笠原氏論文中「一、廬山慧遠の結社事情」十一頁に、「法社」と「法集」の意味の關係について『大宋僧史略』の該当部分を取り上げている。

(42) 野上俊静氏「慧遠と後世の中国浄土教」五、宋代浄土

教関係文献に見える慧遠(一)、『慧遠研究 研究篇』木村英一編 創文社 昭和三七年所収)に、「宋代に至ると、仏教徒の慧遠崇拜は、いよいよその度を強めてきている」として、「浄土教家ではない」贊寧(辞書による解説では律僧とされている)が慧遠を敬慕していた証明に、『大宋僧史略』の該当部分を取り上げる。

- (43) 贊寧『大宋僧史略』巻下 結社法集項は、大五四 二五〇c〜二五一a。『仏書解説大辞典』によれば、同書は「仏教に関する事理・来歴・紀綱・制度を實際に就て列記した手引書」であり、成立は九七八〜九九九年にかけてとある。

- (44) 前掲鎌田氏論文三九二頁参照。なお、慧皎『高僧傳』巻六の該当箇所は大五〇 三五八c、僧祐(四四五〜五一八)『出三藏記集』巻十六の該当箇所は大五五 一〇九c。

- (45) 前掲「廬山精舎誓文」に「乃延命同志息心貞信之士百有二十三人、集于廬山之陰般若雲臺精舎阿彌陀像前。」とある。

- (46) 『浄土往生傳』巻上 釋慧遠章該当部分は大五一 一〇a〜b。

- (47) 「元中記」に「龍眠李伯時、爲余作蓮社十八賢圖。追寫當時事、按十八賢行狀。」とあることから想像し得る。

- (48) 陳舜愈『廬山記』巻三「十八賢傳第五」は、大五一 一〇三九a〜一〇四二b。

- (49) 「旧十八賢伝」は『廬山記』序文(大五一 一〇三九

a)に、

廬山豈獨水石能冠天下。由代有高賢隱居以傳。東林寺舊有十八賢傳。不知何人所作。文字淺近。以事驗諸前史。往往乖謬。讀者陋之。使古人風跡用無知者。惜哉。予既作山記。乃因舊本參質晉宋史及高僧傳。粗加刊正。或舊所脱略。今無有可考。亦見如之何也。

とあることから、その存在を知ることができる。

- (50) 李常の序文は大五一 一〇二四c。李常は、皇祐年間(二〇四九〜一〇五三)に進士、熙寧(一〇六九〜一〇七七)中に右正言。王安石と親交があつたが、陳舜愈と同じく王安石の新品法に反対したため、鄧州・成都・陝州へ左遷され客死する。『宋人傳記資料索引』二 八六九頁参照。

- (51) 劉渙の序文は大五一 一〇二四c〜一〇二五a。

予雅愛廬山之勝。棄官歸南。遂得「」之陽游覽既久。遇景亦多。或賦或錄。雜爲「」將欲次之。而未暇也。熙寧中。會陳令舉。以言事□於是邦山林之嗜既同。相與乘黃犢。往來山間。歲月之積。遂得窮探極觀無所不究。令舉乃採予所錄。及古今之所紀。耆舊之所傳。與夫耳目之所經見。類而次之。以爲記其詳。蓋足以傳後。予材不可以應時宜。退老於林野。令舉以制策擢上第。名聲赫赫驚世。仕不二十歲。乃廢於筮庫。而與予共見於此記。甚可惜也。然推古以較今。豈特一令舉爲可惜哉。

江西劉渙序

(52) 註(49)参照。

(53) 前掲鎌田氏論文、松本文三郎氏「東林十八高賢伝の研究」(『大谷学報』第二十三卷第二号 大谷大学 昭和十七年)参照。松本氏は、陸脩静・周統之を挙げて慧遠と時代が合わないことを取り上げている。ちなみに、松本氏は「元豊庚申の歳(三年)には李龍眠が陳本十八賢伝により其図を描く」と指摘している。

(54) 慧皎『高僧傳』の該当箇所は大五〇 三六三a。

(55) 『佛祖統紀』卷十二 本如伝(大四九 一二四b)に 師慕廬山之風。與丞相章郇公諸賢結白蓮社。六七年 来遂成巨刹。乃以能仁山林三之一。指嶺爲界。以供 樵薪。仁宗欽其道。遂賜名爲白蓮。

とある。神照本如は四明知礼に学んだ天台浄土教の僧侶で、念仏を中心とする実践主義者と理解されているようだ。福島光哉氏『宋代天台浄土教の研究』(平成七年 文栄堂書店)参照。

(56) 前掲曹氏論文に「他(公麟)的甥張激」とある。ただし、筆者はこうした記載のある資料を未確認なので、本文に「一説に」とした。『宋人傳記資料索引』三 二二三 一一頁によれば、張激の字は如瑩・達明、号は澹岳。靖康初(一一二六)に監察御史、建炎三年(一一二九)に御史中丞から尚書右丞に昇進している。著書に澹巖集・畫録廣遺。

(57) 張激『畫録廣遺』一卷は、紹興己未(九年)一一一三

九)の自序のある短い画家伝で、李公麟とほぼ同時代の画家数人が列記されている。『美術叢書』第四集第十二輯二冊所収。

(58) 前掲曹氏論文二百七頁に「這所謂江南李氏、指五代南唐亡國的李後主而言。後主雖是一位亡國的君主、但他在詞這一方面的創作。直到今天還受到人們的歌頌。江南是中国文化最爲發達的地方、而李氏又是江南的大族、在文化方面自然有相當的遺傳。」とある。

(59) 『文忠集』は、四庫全書珍本第六七八冊を参照している。著者周必大の字は子充・洪道。紹興二一(一一五一)年に進士。最終職官は益国公。諡は文忠。著書に『文忠公集』二百卷。『宋人傳記資料索引』二 一四六八頁参照。

(60) 『佛祖統紀』卷二六該当部分は大四九 一二三a。

(61) 塩谷温氏『中国文学概論』(講談社学術文庫 昭和五八年 講談社)五十六頁参照。

(62) 前掲塩谷氏五十九頁参照。

(63) 註(18)参照。

(64) 李公麟が活躍していた北宋の十一世紀頃、確かに古文をもっと書こうという運動はおこっていた。筆者は勉強不足からそれを駢儷体排斥運動と認識していたが、決してそうではないようだ。散文の主流は古文になったものの、駢儷体の修辭法、韻文調を意識して書いた優れた文章には、「建安の風格」と評価する寛容さがあつたと思われる。

(65) 前掲松本氏論文十七頁参照。

(66) 西部文浄『茶席の禅機画』(平成二年 淡交社)二九〇頁参照。

(67) 「元中記」がどれほどくわしく記されているかを、登場人物の描写部分を引用して示す。

……崑之外、遊行而来者二人。一人登嶺出半身者宗炳也。一人躡石磴而下者曇順也。崑中經筵會講者四人。一人踞床憑几揮塵而講說者道生也。一人持羽扇、目注懸猿而意在深聽者雷次宗也。一人合掌坐于床下者道敬也。一人相向而坐曇詵也。一人執經卷、跪聽于其後。童子一人舒足搔首、有倦聽之意。蓮池之上纒石台、坐而箋經校義者五人。石上列香炉・筆硯之具。一人凭石而坐者劉程之也。一人手開經軸、倚石而回視者張詮也。一人正坐俯而閱經者慧叡也。一人回坐拱手、傍視而沈思者慧持也。一人持如意而指經者慧永也。(中略)又一巖中有文殊金像、纒坐其下爲佛事者三人。一人執爐跪而歌頌者曇恒也。一人坐而擊拳者道昺也。一人執經卷而坐者周續之也。臨溪偶坐者二人。皆梵僧。一人袒肩持短錫者跋陀羅坦腹、仰視懸泉、坐而濯足者張野也。(略)石橋之傍峭壁崛起。前有僧與道士、相促而咲者、遠公送陸道士過虎溪也。一人貌怪雄視、捉巾・瓶而立者捕蛇翁也。(略)一人乘籃輿者淵明之過去也。(中略)一人持貝葉、騎而方来者謝靈運也。……

(68) 李昭玘(未詳)は字成季、樂静先生と号する。『宋史』

卷三四七。『宋人傳記資料索引』二一〇〇五頁参照。

(69) 『樂静集』は四庫全書珍本初集 集部別集類所収。なお、前掲鈴木氏三二四頁の「李明玘『樂全集』」の記載は同書の誤りだと思われる。「跋孟仲寧畫蓮社圖」は以下のとおり。

舒城李伯時作蓮社圖。士大夫傳以爲佳玩謂可與輞川並馳。潁川晁无咎復得遺意頗加損。蓋集古名筆以繕工孟仲寧爲之。曰可曰否、如左如右。獵奇擷妙、變化隨出。雖摩詰復生恐不能過也。夫意之所詣爲難、了人之意亦非易。伶人吹管、佞工捻竅。直肆橫出、抗厲厭抑。終不如律、使其心運指應。皆與神會則不諸矣。古之任事者嘗患不得、其人爲用、用或非其人故。余於此畫特有取焉耳。

(70) 晁補之は字无咎、歸來子と号す。幼い頃から聡明で、十七才のとき父に従って杭州入りし、その頃から風物などを書き記していた。元豊二年(一〇七九)に進士。絵画にも通じていた。著書に雞助集七十卷、晁无咎詩がある。『宋史』卷四四四。『宋人傳記資料索引』三一九五二頁参照。

(71) 張耒『柯山集』卷二八(三十)の「同文唱和詩」章には、おそらく同時に詠まれたと考えられる構成で、李公麟と晁補之の詩が他の人々と共に並んでいる。『叢書集成 新編』第六十二冊参照。

(72) 晁補之の題跋詩文をまとめている。『叢書集成 新編』

第五〇冊所収。

(73) 樓鑰は字を大防、攻媿主人と号す。翰林学士・枢密院を経て参政に上る。『宋史』卷三九五。

(74) 『攻媿集』一二〇巻は、武英殿聚珍版本を参照している。序文はやはり参知政事に上つた真徳秀(一一七八〜一二三五)が書いている。題画文学を多く作り収録している点で筆者は注目している。また、禅宗関係の資料も豊富なことが、石井修道氏「『攻媿集』にみられる禅宗資料」(『東方宗教』第三九号 一九七二年 日本道教学会)で指摘されている。

(75) 『東林十八高賢傳』一卷は著者不明。大観初(一一〇七)の年記があり、成立もこの前後と考えられる。続蔵一三五 一〜二〇所収。

(76) 卍統蔵所収の図が李公麟の真作でないことは、鹿が一頭いるほかは動物が描かれていないところから確信できる。

(77) 『浄土依憑経論章疏目録』は、日仏全 目録部第一 三五二頁所収。浄土教関係の中国・日本の資料名を列記している。巻末に「明徳五年八月一日 執筆良實房」とあり、これが成立年代とどう関わっているかわからない。その他の年記も見当たらないが、書誌学的検討については、未確認である。

(78) 陸游、字は務観。秦檜によって不遇な時期もあったが、孝宗の信頼を得て枢密院に配属されるなどした。詩に巧みで放翁と号して多くの詩を遺した。著作に劍南詩

稿八五巻・入蜀記・南唐書・放翁詞など多数。『宋史』卷三九五。『宋人傳記資料索引』三参照。

(79) この文章は『放翁題跋』卷三「跋歸去来白蓮社圖」である。同書は『叢書集成 新編』第五一冊所収。

(80) 「自由な」という表現は、実は不適切かもしれない。文章を書くには、基礎知識が必要だが、この知識が「自由」に少なからぬ制限を与えているからである。